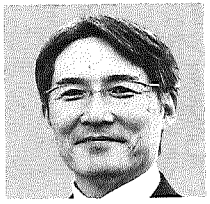
会えば会うほどに

週のはじめに考える

株警戒きませの門戸ただ新たいてイン会

時代を読む

打たない自由と打てない理由



専修大学教授　山田（やまだ）　健太（けんた）

日本は同調圧力がかかりやすい社会とされる。二年近いコロナ禍においても、政府方針に反しているという表向きの理由で、自粛警察や帰省狩りが生まれた背景には、コロナ感染拡大に対する危機感や恐怖心とともに、こうした社会的な土壌があったといえよう。さらには、医療従事者をはじめ、エッセンシャルワーカーやその家族に対する、いわゆるコロナ差別の風潮が生まれたことも、極端な同質性や潔癖性を指向する日本社会の反映であったと思われる。

本来なら感染者の医療的隔離を法律上厳格に実施する一方で、社会的隔離はその必要性を十分に検討し、最小限度で行われなくてはなるまい。しかし、この間、医療的隔離が自宅療養という名でルーズな一方で、それに反比例するように感染リスクが少しでも高い人を社会的に区別・排除する排他的状況が進んだ。しかも社会の空気は、よりその傾向を強く推し進める方向に働いており、とりわけ感染蔓延（まんえん）状況にある時に顕著だ。

ワクチン接種に関して日本は、予防接種を巡る過去の経緯から、強制ではなく「任意」であることが強くうたわれてきたし、政府の政策の基本方針でもある。にもかかわらず、実際には接種が事実上強要されるような事態が職域接種のなかで生まれたり、接種率が上がることでワクチン接種が日常の話題にあがることとなり、その中で「打たない自由」「打てない理由」を口に出すことがはばかられる状況が生まれたりしている。未接種はわがままではなく、私たちの誰もが有する自己決定権の行使の問題だ。

「接種をしないこと＝悪」といった印象や空気感が広がることで、打てない人に大きな精神的プレッシャーを与えるほか、打たない選択肢を奪うものとなっている。さらには、未接種者を危険人物や変わり者として社会的に白眼視することにもつながる。

行政の役割は、接種の準備を整えるとともに、接種をしなくても原則、接種した人と同じ日常生活が過ごせる環境を用意することが大切だ。あるいは政府広告においても、接種検討を呼びかける場合には「ただし打たないという選択肢がある」ことをきちんと伝える努力をすべきだろう。同様に政府の基本的対処方針にも組み込まれた「ワクチン・検査パッケージ制度」においても、マイナンバーカード普及やスマホへの実装といったデジタル化政策に傾斜することなく、実際に未接種者のPCR検査が簡単に受けられる環境（いつでも・どこでも・だれでも・ただで）の整備が追い付かなければ、当該者に対する区別が「差別」になる可能性が高い。

そもそも、コロナ感染のリスクを抑えつつ日常生活を取り戻すこと、ワクチン接種率を無理にでも上げることはイコールではない。ましてや未接種者に必要以上の不便を強いたり、区別をすることで社会的隔離につながったりするのは許されない。パラリンピックの開閉会式で紹介された「We The 15」は世界人口の15％を占める障碍（しょうがい）者を包摂した差別のない社会をめざす運動だが、日本で同じ比率に近づきつつある未接種者が、それを意識せずに普通に生活できるのが一番だ。こうした最低限の理解を、政府をはじめメディアも含めた社会全体で確認したうえで、私たち自身も少しの我慢を受け入れていきたい。

2021.11.28

「若者の声」欄に届いた高校生の投稿をきっかけに、「人材」と「人財」について考える記事を、14日付朝刊1面に掲載しました。高校生は「自分の意見を投書することで、少しだけ世界を良くしてみよう」との高校の先生の呼び掛けに感銘を受け、投稿してくれたそうです。

記事掲載後、読者の方々からさまざまなご

新聞記事の短い一行一行で支える幅広いファクト（積み重ねを裏付けとしている）

十一月十三日朝刊の編集街路樹の話を書きました。内の画面に表示されていた答えのことです。街路樹に多いのはなぜ？　夏は日陰道行く人に日差しをもたらと。そんなこと常識だよ、人も少なくないでしょう。でも、現実はそう単純で

イチョウなどが並ぶ霞が関・官庁街の街路樹